

中国・内モンゴル自治区フフホト出張（2019年9月）

人事課/国際戦略室 高木宏光

先の9月、国際標準化機構（ISO）における汚泥の回収・再利用・処理と廃棄に関する各種規格開発会議が中国は内モンゴル自治区・呼和浩特（フフホト）にて開催され、これに参加する為に同地を訪問致しました。今回のメールマガジンではその議論の状況ならびに現地の様子についてご紹介させていただきます。

◆場所

北京より飛行機で1時間半ほど北西に飛んだ先にフフホトと呼ばれる中国の地方都市があります。同地はチベット仏教に帰依しモンゴルを支配したアルタン・ハーンによって治められた歴史を持っており、モンゴル文化とチベット仏教の影響を所々に感じる事が出来ます。気候は比較的冷涼ですが、物価も安く、北京などと比べて人口密度も低いため、過ごし易い落ち着いた街となっております。



フフホト（の道路…）

◆会議

ISOは様々な産業分野において共通の規格標準類を準備する事により、各国の外国市場へのサービス提供や貿易を促進する事を目的としております。今回、我々日本チームは汚泥の回収、再利用、処置と廃棄に関する各種規格開発ワーキンググループに参加してまいりました。日本チームはとりわけ熱操作や、無機物および栄養塩類の回収に関するワーキンググループに積極的に関与し、その成果もあってこれらのワーキンググループでは本邦技術を多数織り込む形で技術報告書を発行する見通しとなっております。この他の規格開発テーマにおいても、日本企業が海外展開において不利とならない様、モニタリングを行ってまいりました。



ISO TC275 本会議の様子

◆食事

さて、訊く所によりますと本メールマガジンの読者の皆様は旅行記において真面目な話はあまり期待していないと伺いましたので、早速文化的な側面に焦点を移させていただきます。先ずは一番人気の食事情についてですが、北部の冷涼な気候が影響してか、フフホトでは味が濃く脂が多いメニューが主流となっております。そして、たんぱく源として羊肉が重宝されているせいか、ややクセが強く、全体的に慣れが必要な味つけが多いと感じました。個人的には、毎朝提供される Roasting son という謎の塊は癖がなくて好みだったのですが、外国人の方が料理の前で暫く固まっていたのが印象的でした。



Roasting son (焙る息子?)

◆名所

チベット仏教の影響が強い地域でありますので、足を伸ばせば歴史の古い寺院を観光する事が出来ます。その中でも大召寺という寺院は特に有名であり、多数の仏像や涅槃図、曼荼羅などが展示されておりました。尚、大召寺では至る所に摩尼車（経文が印字された円筒、回すことにより功德を得る）が備え付けられておまして、私は暫く大召寺に留まり、一心不乱に摩尼車を回しておりました。恐らく 1000 回ぐらい回していたのではないのでしょうか、今や日本で一番徳が高い下水道関係者かもしれません。とりとめのない出張記録ではございますが、徳の高さに免じて許して頂けると喜ばしいと考える今日この頃です。



大召寺



摩尼車